
こころのほうこう

伊達 稔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こころのほうこう

【Nコード】

N4071C

【作者名】

伊達 秤

【あらすじ】

私立光院学園高校というどこか微妙な名前の高校に入学した比野 往人。だが入学式前日に学校から呼び出しを受けてちよっとだけ面倒な事を引き受けてしまった。そのちよっとだけ面倒な事とは女の子と友達になり、ボディガードをする事。さあ比野往人はこれからどうやって学園生活を過ごしていくのか。

プロローグ（前書き）

ほぼ無定期の連載になると思いますが、週に一度は更新できるようにと思っています。

毎回見てもらえると嬉しいです。

あなたに少しの暇つぶしを。

プロローグ

俺は屋上で弁当を食べた後。仰向けになって空を眺めていた。

「比野^{ひの}さん。比野さん。こんな所つまんないです。もっと別の場所いきましようよー」

それで隣に女の子が頬を膨らませながら文句を言っている。

「勝手についてきたのはお前だろ」

「そうですね、屋上で寝ているだけなんてつまらないです」

「そつだろつなー」

昼食をここで食べ終わってこの体勢になってから十分になるし、めんどうなので適当に返事しておく。

「むう。とことんやる気無しですねー。こうなったら奥の手です」

そう言っただけの子は立ち上がり、俺の頭の上まで来て、

次の瞬間俺の額に手刀を繰り出した。あまり痛くないけど。

「……なにしゃがる」

「比野さんがつまらないからいけないんですよ。遊びましようよ遊びましようよ」

そう言っただけの子は男子にしては長い方の比野の髪で遊び始める。

「高校生になつて昼休みにできる事なんてそうないだろう」

「そうですねですか？」

「そうですねです」

「でも昼間つからこうゴロゴロするのはどうかと思えます」

まあ一理ある。

「だからって俺の髪をいじるな」

「いいじゃないですか。比野さんの髪さらさらしてるんですもん」

なにがもんだ。髪がさらさらしてるからついでで弄っていい理由になるか。

「なりますよー。頭丸刈りの人が意味もなく頭なでられたりとかちよつとおなかが出ている人がむやみにおなかを触られるのと同じ理

「屈です」

微妙に納得できるが認めてしまっただメだろう。

「これからする事があるから早く放せ」

そう言いながら俺は上半身を起こし、枕代わりにしていた弁当箱を持って立ち上がる。

「そう言うなら放しますけど、一体何をするんですか？」

女の子が瞳を少し輝かせながら見ている。

「授業だ」

キーン コーン カーン コーン。

言つと同時に予鈴のチャイムが鳴った。

「ああ、ずるいです！卑怯です！比野さん！結局屋上だけで貴重な昼休みを潰しちゃいましたし、私がこんなにも名前を呼んで

上げてるのに今だに私の事が女の子止まりじゃないですか！」

めざとい。

「何のことだ？俺はなにもしていないと思うが？」

とぼけると女の子は怒りが頂点に達したようで、

「何もしてないからいけないんです！もう許しません。こうなったら奥の手です！」

さっきも奥の手出ただろ。言おうとしたのだがその前に女の子は手を振り上げて、

「いろはチョーリップ！」

さっきのより威力十倍はありそうな手刀を頭頂部に繰り出した。

しかも技に自分の名前を織り交ぜながら。

「痛ッッ」

会心の一撃だ。絶妙な角度で入ったせいでかなり効いた。

「彩楓いろは・・・今のはかなり痛かったぞ」

「痛くなるように叩いたんだから当然です」

彩楓は頬を膨らませて怒っている。

「いまだき頬を膨らませるのは……」

「いまだき、なんですか？」

こっちがいい終わらないうちに声を被せて来た。手が肩のあたりまで上がって来ているのが見えたので、また手刀を繰り出される

前に続きを言うのはやめた。

「いや、なんもない。それよりも早く行かないと授業に遅れるんだが」

「どうしてそれを早く言わないんですかー！」

俺の記憶ではお前に殴られる前に行つてた気がするんだけどな、まあそんなこと言つても無駄な気がするので、

「とりあえず行くぞ」

言つて俺は歩きだした。

「あ、お弁当片付けてるんで待つてくださいよー」

自業自得だ。俺に遊びを要求する前にやっておけ。

俺は太陽から降り注ぐ日と心地良い風を惜しみながら屋上を後にした。

「おう、遅かったな」

教室に戻ると緋良也（ひらや）が声をかけてきた。

「まあ割りと寛（くわん）いでたからな」

俺は窓際の前から三番目。後ろからも三番目というちょっとだけ微妙な自分の席に付き、鞆（たもと）に弁当箱を片付けながら応答した。

「で、お嬢さんは？」

ちなみに緋良也は後ろの席。

「屋上に置いて来た」

「おいおい。そんなことしていいのかよ。学長に停学にされたりと

かしないのか？」

「それはさすがにないだろ」

この少しだけおせっかいやきな性格をしているのは、空賀 緋良也^や。俺の幼馴染であり、親友と言ってもいい存在。

「まあ、お前がいろいろ言うならいいんだけどな」

基本的に愛想は良いが、ケンカが強いので男子で怖がる奴もいたりする。でも女子には相乗効果でかなり人気があり、事実かどうかは知らないが中学の時にファンクラブもあつたって聞いたことがある。

「でもなんでお嬢さんのお守りを往人^{ゆきと}が任されたんだろっねえ。」

緋良也は何故か嬉しそうに話してやがる。

まあそれはいいとして重要なのは緋良也の言った事だ。俺が通う学校。私立光院学園高等学校。院か園か校かどれかにしろと

言いたい名前だ。そこに通っている生徒としては言えた義理ではないのだが、名前も変わってれば学校の最高責任者。学長が少し異常・・・いや偉大な人で一代で結構な財政を築き上げ、本当に自由な学校が欲しい、とか言つて、校内に喫茶店があつたり、売店もそこらへんのコンビニと同じくらい充実した品揃えで、いたる所にベンチや自販機があつたりする。行事も盛んで、創立からの伝統行事以外は生徒会が全て取り仕切り、学長が認めれば予算は学校側が出すと言う全国の生徒があこがれる本当に自由すぎる学校を作ってしまったのである。それだけに競争率も高いのだが。

そして、そのどこかのネジが外れている学長になぜか頼まれた女の子。それがさつき屋上にいた彩楓だ。

「・・・さあ。多分俺の運が非常に良いか非常に悪いかのどっちかだからだろうな」

プロローグ（後書き）

読んでいただいたありがとうございます。

気になった点や誤字脱字などがもしあればよければ教えてくださいとありがたいです。

気に入っていただければ感想もお願いします。

第01話(前書き)

あなたに少しの展開を

第01話

一ヶ月前の入学式前日。俺は朝起きて、朝食の定番目玉焼きを作り、味噌汁をコトコトやりながら郵便受けに学校側からの封筒があるのを見て、少し驚愕しながら封を切った。

内容は午前十時に校門前に来るようにといい呼び出しを告げるだけの文章だったので、何かと九時五十分には学校につけるよう自転車に乗って学校に来た。そして指定された通りに校門の前に行けば、拾ってくださいと言わんばかりに封筒が落ちていた。まわりに人はいなく、この状況なら呼び出しを受けた俺が開くべきなんだろうと思いつき、拾い上げて中身を確認してみると、中には折りたたまれた紙が二枚。

まず一枚目。

幸運な生徒へ

『おお よくぞ来られた選ばれし勇者よ さあ光の大樹に囚われた神の愛娘を救い出してくれ』

……なんのRPGですか。これは。ていうかハッキリ言ってベタで寒すぎる！これは冒険ファンタジーものではない！

俺は鳥肌ができるのと同時に紙を破りたい衝動に駆られたが、紙の隅っこに小さく書かれた字があったので目を凝らした。

『By学長』

とりあえず破った。学長が凄い人だとは聞いていたがこういう凄い人だなんて聞いてないぞ！

俺は一枚目を全て五ミリ以下に破き、そこらへんに捨てては迷惑なので元々入っていた封筒の中に捨てた。

続いて二枚目。

訳

受験番号 0425 比野 往人君。

光院学園校内にある学園のシンボルにもなっている一番大きな公孫樹ちようの木の下に女の子が待っています。行ってあげてください。

『B y 秘書』

秘書さん通訳ありがとう。でもどうせなら一枚目を学長さんに書かせないでくれ。

俺は顔も知らない秘書さんに適度な感謝の念を。幼馴染の緋良也が持っていたパンフレットの校長紹介の所で見た学長というシルエツトだけだった存在の偉大な人間へ疑惑の念をそれぞれ飛ばしながら校門の前に自転車を止めて歩き出した。当然届かなかったけど。

校内に入るのはこれが初めてだ。この学校が異常に競争率が高いのを知っているので、人がいっぱいで見学どころではないだろうと思つて高校見学なるものには行つていなかっただし、受験では特設会場みたいなものが各地で設けられ、この高校は使われなかつた。

だが歩き初めて数分で、自分がこの学校をなめていた事がよく分かつた。門から入ったら校舎の玄関はすぐにあるものの、体育館が三つあつたり、プールが二つあつたり、剣道場や柔道場が当たり前のように一戸建てで上質そうな檜ひのきで立てられていたり。流石に今は営業していないが、コンビニみたいな売店やら自販機やら。それに敷地が広くて圧迫感が無く、植木が多数してあつて、それなりに自然もある。みんながこの学校に来たがる理由を納得し、自分が分不相応な場所に來ている気がして、学長を尊敬してやってもいい人か考えながら女の子が待っているとかが言う公孫樹ひんげんじゆの木の下へ向かつた。

公孫樹ひんげんじゆの木の下には光院学園指定の制服を来た女の子が確かに待っていた。腰のあたりまで伸びている真っ直ぐで長い黒髪。日に焼けていない白い肌で、顔のパーツの一つ一つが整っている。黒い大きな瞳で、どこか子供のようなあどけなさのある顔立ち。こちらに

気付くと女の子の方から声をかけてきた。

「遅いですよ。比野さんっ」

嬉しそうな起こった声という妙技で女の子は迎えてくれた。

時刻は十時五分過ぎ十時に校門に来るように言われてたんだから、この時間でもセーフな気もしたが、それよりも俺が呼び出された用件が気になる。

「どうして俺が呼び出されたか聞いていいか？」

そう言うとな女の子はきよとした顔で、

「私が名前を知っている事は疑問に思わないんですか？」

と、顎に左の人差し指をつけて考えるような仕種をした。

それは本来なら疑問なのだろうが、学校からの呼び出しでさっきの手紙には受験番号まで書いてあったんだから別に驚くほどのことじゃないだろう。

その事を俺が伝えると、

「まあそうかもしれませんね」

とちよつとつまらなそうに言った。

「じゃあ用件を聞かせてもらえるか？」

「むう。比野さんはせつかちですねーその前に自己紹介がまだです」

一度区切つて、女の子はいったん呼吸をする。

「かんざき神埼いろは十六歳。明日から一年六組に転入する子です」

口調がちよつとあれな気がするが、ん？今転入って言ったか？

「はい。詳しくは手紙に書いてあるそうです」

そう言つて、いろはといった子は手紙を出した。やれやれまた手紙か。

『比野 往人君。君がこの手紙を読んでいるという事は私の手紙はを全て五ミリ以下に破かれ、元々入っていた封筒の中に捨てられた後だろう。』

手紙の主は寂しいくだりでの確に未来予知を成功させていた。

『はっはっは寂しいくだけで私の凄さを発揮できたようで良かったよ』

「これは学長が？」

「はい」

「いつこの手紙をもらったんだ？」

「んーと昨日の昼頃ですかね」

学長。あんた一体何者だよ。

『私の正体が気になるだろうが、それは今回関係ないので黙っておくとしよう』

うわ、すげー気になるんですけど

『我慢。我慢。』

うざい。ていうか手紙で会話するな！いや、読んでる俺ができてるんだからもしかしたら俺がおかしいのか？

『さて、比野君が疑心暗鬼になりかけた所で話を進めよう。今回^{かん}神埼彩楓^{さいほ}から一年六組に転入することは聞いてると思うんだが、明日4月5日は入学式。一年生なのに転入ってことで疑問に思ったことだと思っ』

突っ込みたい事はあるがまあそうだな。

『何故入学ではなくて転入なのか、それはこの子が本来なら今年度から高校二年生だからだ』

どづいつ事だ？

『神崎彩楓は今まで病気で体が悪く、ずっと病院で過ごしてきた。高校に入学はしていたものの、学校の授業等は全く出ていなかった。だから留年しているものと考えてもらっていい。ここまでは分かったね？』

手紙で聞くな。

『それで、この子は今回体の調子もだいぶ良くなり、学校に登校できるようになるまで回復した。そして今年度から我が光院学園に入学及び転入する事になった。だがしかし、問題はここからだ。耳かっぼじって良く聞きなさい』

手紙だっつの。

『学園で神崎彩楓に何か事があつたらいけないので、ボディーガードのような人を付けなければならない。だがあからさまにそんなのを付けたら周りの生徒が快くと思わないだろう。そして今までずっと病院で過ごしてきたため、神崎彩楓は恋人はもちろんのこと友達一人いない。だから、』

だから？

『君に、神崎彩楓の友達第一号兼ボディーガードになってもらいたい』

.....

『ボディーガードと言っても、黒服のSPのような者ではない。残

念だな。』

残念じゃねーよ。

『神埼彩楓の体に学校で生活していく上で悪影響がないか、体調がすぐれていない時は保健室につれていく、見たいな保健委員みたいなことをしてくれればいい。それと周囲の人間には同い年という事で通すように。あとは本人と話し合って決めてくれればいい』

おいおい。

『追伸。君は神埼彩楓と同じ一年六組で、席替えがすぐ行われる事になる。最初はあみだくじで決める事になっているので、君の隣の席は神埼彩楓になるよう仕組みねばならない。この事は一年六組担当の橘先生たちばなに、仕組むようにとだけ伝えてあるので、上手くやってくれるだろう。考えておくといい。これはほとんど決定事項みたいなもので、もしこれを断るならば、本来楽しいはずのスクールライフは望めないと思われる。比野 往人に栄光あれ！』

手紙の最後はそう締めくくられていた。

俺はしばらく手紙を見て呆然としていた。友達？ボディーガード？
「あの、大丈夫ですか？」

もしかしたら大丈夫じゃないかもしれないが、俺はいつでもそれほどに冷静で正常のつもりだ。状況はまあなんとなく分かった。この子は自分と同年代、下手すると下に見えるこの子は、全然そうは見えないけど本当は年上で、元気そうに見えるけどそうだったのは最近で、病院の外にあまり出た事が無くもしかしたら人付き合いも下手なのかもしれない。

それでおそらくだが病気は完治してなくて、何かの弾みで急に悪くなったりとかするかもしれない。学園内で病気が悪化などしたら

いろいろと困るんだろう。大人の嫌な事情だ。精神と身体は連動しているから、なにか困った時は、精神的に誰かが支えてやら無いと病気も悪化するんだろう。それで体調の事を気遣ってくれる人と友達が必要だった。うん分かった分かったとも。ついでに言うとう入学して最初に味わうはずの、『どこのクラスになるのか』とか、『担任はどんな奴だろう』とかの友達とワクワクしながら見る機会は失ったわけだ。まあ俺はそういう事で楽しめるような奴じゃないが、

「でもなんで俺なんだ？」
当然の疑問。独り言のように言ったそれだったが、彩楓に聞こえたようだ。

「えっと・・・それは・・・その・・・あの・・・」

「
彩楓は口ごもってしまった。そして数秒間俯むいた後、何か閃いたような感じで、

「くじです！」

とだけ言った。くじ

「・・・それは学長が？」

俺の怒りのような嘆きのような声で彩楓を見た事が怖がらせてしまったらしく、

彩楓に目をそらされてしまった。

「えっと・・・その・・・」

無言で首を縦に振った。

八つ当たりしたわけでは無かったんだが、どこかで俺の憤怒を思いつきりぶつける必要があるな。もちろん学長とか言う偉大だろうけど異常な奴に。

たまたま今年入学した一般生徒の中からくじで適当に選んでそれなりに重要そうな仕事を押し付けるとは何事か！しっかりと人選しろ！

「あの・・・それで友達になってくれますか？」

断れば楽しいスクールライフは失われるらしいので、

「……やらないと、いけないんだろうな」

とだけ言った。すると彩楓は笑っていた。それなりにかわいいんじゃないかな。多分。

そして、俺はとりあえず学長の事を脳内ブラックリストに刻んでおく事にした。

さて、言いたい事はかなりあるが、ここでそれを言っていても始まらない。たった今引き受けてしまったんだから、これからの事を話し合う必要があるだろう。俺はする事が決まったら早いんだ。

とりあえずできるだけ学校で一緒にいればいいんだろう。でも校内ですつと一緒にいるわけにも行かないだろうし。

「友達なんだからいいんじゃないですか？」
「いいらしい。」

「あの、席どうしましょう」

「担任の橋が細工するとか言うやつか。」

「はい、あまり真ん中だとあの、人がいっぱい……」

危険なんてものはないだろうが、人付き合いに少し困るのかもしれない。窓際の方がなにかと都合がいいだろう。俺も窓際がいいし。

「じゃあ窓際の席のがいいな。前の方が後ろの方。どっちがいい？」

「前がいいです」

そうか。

「じゃあ後ろで」

「前って言ったのになんで後ろなんですかー！」

そう言っって手を振り上げた。

控えめな子かと思ったが案外元気なんだな。

「世の中自分の思い通りにならない事もあるんだ。うん」

言い聞かせるように俺は言った。

単に自分が前が嫌なだけ、それと学長へのささやかな抵抗だ。

「比野さん意地悪です」

ちよつと拗ねたらしい。

「じゃあ何か他に決めておくことはないか？」

「んー決めとくことはないですけど、私この町来たばかりなんでよくわからないんですよ。これから案内してくれませんか？」

「・・・それは今度だな」

「なんでですか？」

明日は入学式。いろいろと準備する事もある。それに今日は日曜。

「駅前のスーパーの特売日なんだ」

「はい？」

まあ病院ぐらしでは分からない事もある。

「いや、用事があるから、じゃあ明日。入学式で」

「あ・・・はい。これからよろしく願いします！」

最後に彩楓は笑顔で手を差し伸べてきたので、軽く握手をして別れた。

こうして俺は彩楓の友達第一号兼ボディガードになったのだった。

学長。あんたはいつか殴ってやるぜ。

第01話（後書き）

読んでいたたいてありがとうございます。

気になった点や誤字脱字などがもしあればよければ教えてくださいとありがたいです。

気に入っていただければ感想もお願いします。

第02話(前書き)

あなたに少しの日常を

第02話

入学式は現生徒会長とか言う奴の話だけで終わり、あのふざけた学長は姿を現さなかった。一人一人の自己紹介が終わってすぐに行った席替えは、担任になったたちほなめ橘要と言う女教師に、窓際後方二番目が良いと言ったのだが、どこか抜けているらしく一つずれてしまった。クラスの全員に公表された後に間違いに気付いたので、どうしようもなかった。

こんな感じで入学式初日を微妙な気分で過ごしてまった俺。別にはしゃぐつもりは最初からなかったが、どこか損をしている気分だった。

「なーに暗い顔してんですか。比野さん。私を置いていった自責の念にでも駆られてるんですか？」

置いてきた彩楓が戻ってきて、隣の席に付いた。どうせならここも間違えてしまえば良かったのに、しっかりと学長の命令が守られているのが意味もなく恨めしい。

「全く事そんな事は思っていないから安心しろ。」

「友達なのに失礼ですよ。比野さん」

「はいはい・・・」

学長に頼まれて引き受けたとはいえ、俺はあまりやる気を持っていなかった。いや、最初はそれなりにやる気もあったのだが、入学式から日がたつてほとんど何事も起こることなく学園生活をしていった。正直一ヶ月も立つと普通のクラスメイトみたいな気分とあまり変わらない。ただ、その間も俺はほとんど彩楓と一緒にいたのでけっこう柔らかな感じで話しかけられることも多くなった。彩楓が言うに友達なら当然らしいけど。それに、俺が彩楓を護衛する。っていうかんじではなく、彩楓が俺に付き添っている事という感じで気分的には過ごしている。一緒にいることは多いものの、そんなに束縛的な制限などは無かった。ただ時々、

「比野さん。校内探検がしたいです。いきましよう」

とか、

「校内の喫茶店のメニューを片っ端から頼んでみたいですよ！」

とかたまにめんどろな事を言ってくることもある。俺が拒否すると、

「私が探検している間に運動のはずみで呼吸困難になったらどうするんですか！」

とか

「私が喫茶店でデラックスお好み焼きのようなたこ焼き風パフェを食べている間に気持ち悪くなって倒れたりとかしたらどうするんですか！」

などと俺のボディガードとしての役割を言い出すのだ。ていうか気持ち悪くなるならそんなの頼むなよと思うだろう。俺も言ったさ。でも何故か探究心や好奇心をむき出しで実行してしまうから、仕方なく俺も付き添って行くことになったりする。ちなみにちよつともらったんだが、俺は一口食べてギブアップした。

「どうですか？おいしいでしょう」

と胸を張って言うのだがハッキリ言っただけでかなりまずかった。吐くのをこらえるので精一杯だ。こいつが病院に行っただのは味覚に障害を持っていたからなのかと思わず聞いたぐらいだ。彩楓は「失礼ですねー」の一言で片付けてしまったけど。こいつが本当は病気なんかじゃなくただのバカなんじゃないかと疑うことは何度もあるが、それでもたまに胸を押さえて苦しそうな顔をしたりする事がある。俺が大丈夫か聞くと決まって「大丈夫」とだけ言ってその場に座りこむ。強がっているのが逆に心配で、放っておくことができない。常に気遣って心配ばかりしていると俺の気が多分持たないろうし、彩楓も辛気臭い顔してますねーとか言っただけからかい半分で言ってくる。かといって放つたらかきにする、さっきのように『死んじゃったらどうするんですかー』みたいな事を言ってくる。俺の周りでは人死にはゴメンこうむりたい。状況判断と微妙な心のコントロール

が必要なのだ。

緋良也には学長に頼まれたとしか説明してないので、元々そんな気はないが相談等はできない。結局、半ば押し付けられたとはいえ俺が一人で背負ったもの。途中で投げ出すこともできまい。いやこれは言ってみただけでさらさら考えてないけどね。

そして俺を悩ませ微妙に憂鬱にさせてくれる本人は楽しそうに英語の授業を受けている。結構頭はいいらしく、授業ではしっかりと受け答えができている。まあ本来二年生なんだから当然か。

「比野一次の訳やってみろ」

英語担当の挫丘つちかに指名された。俺が気を抜いているとも思ったんだろう。

えっと問題文は、

I do not do a slipshod job so
that you think. But I will fo
r give it because I am generous .

.....

「..... 答えて..... いいんですか？」

「ああもちろん。やってみろ」

自信満々だ。でもやっていいって言ったんだ仕方がない。

「あなたが考えるように、私は皆さんの仕事をしません。しかし、私は気前がよいので、私はそれを許します。わかりやすく言うと僕はあなたの思ってるほど手を抜いていない。でも僕は心が広いので許しましょう」

「..... よろしい」

そう言って挫丘つちか教諭はくやしそうな顔をした。どうせなら答えられても大丈夫な問題にしろよ。俺が嫌味を言ってるみたいじゃないか。

「比野さんって度胸ありますねー」
ほら、隣がなんか言ってるよ。教室がちょっとざわついている気がするし、俺は悪くないぞ。俺はそのあと真面目に余計な事を考えずに授業を受けていたんだが、挫丘さぶかが俺の方をあからさまに避けているので全く何事もなく終わった。評判、少し落ちたかも。

放課後。特に部活に所属していなく、興味も無い俺は暇を持て余している。

「なのになーんで俺はバスケット部の練習している体育館にいるんだ」
言って俺は隣にいる彩楓を見る。

「比野さん。運動は大事ですよ。体を動かさないと体はなまる一方です。昼間ぐーたらしてる比野さんはこのままだとダメ人間になってしまいます。だから参加しましょう！」

別に帰宅部がダメ人間って事はないだろうに、それに参加するっただって部活に属する気はさらさらないぞ。

「私も別にずーっと運動しろなんていいませんよ。それに入部する気が無くても今の時期なら仮入部という手があります。一日パーッとやって帰ってしまえばいいだけです」

微妙に失礼だな。入部する気はないのに遊びに来るのは。

「いいんですいいんです。そういう期間なんですから細かいことは気にしません」

あっけらかんと言いつつ彩楓。

「だが仮入部するにはそういう受付用紙が必要なんじゃないか？あい生憎にく俺は持ち合わせていない。」

そう言えば彩楓はにやりと笑う。

「チツチツチ。比野さんが持っていないのはもちろん承知しています。でもそれは私にご用意致しました！」

そう言っつて鞆から『体験入部届け』と上の方に書かれたをプリントを俺に見せつけるようにしてだした。

ださなくていいのに。

「さあ鳴海さん。いきますよ！上手くできなくてもあとで慰めて恩を売ってあげますから！」

後半余計な事を言ったのに気付いてないようだ。どんどん男子バスケットの方に歩いていってしまう。ていうかもう出しやがった。俺は何もいってないぞ！

「もう遅いです。出しちゃいましたから、別に体操服じゃなくてもいいそうなのでちゃっちゃとやって挫折ちゃって来てください。待ってますから」

終始笑顔。かなり性格悪いぞ、こいつ。

「君が比野君だね。僕は部長の高林たかはやし。バスケットの経験は？」

髪を短く切った爽やかそうな青年が声をかけて来た。さすがバスケット部長、でかい。百九十は余裕であるだろう。

「中学の授業でやった程度です」

「まずはフリーシュートから、向こうでみんなやってるから。それじゃ」

そう言ってバスケットコートに戻っていった。バスケの経験の事を話したら落胆したのが分かった。俺がバスケット未経験者だから使えないと思っただろう。少し気に入らない。

「期待はされてないようだぞ？」

彩楓に話を振ってみる。

「別に入部するわけじゃないんですからいいじゃないですか。それに私も期待してませよ？」

「そっぴゃ恩を売るとか言ってたなこいつは。」

「はあ・・・じゃあ気分転換のついでに適当にやってくるよ。」

俺は仮入部者らしき連中が列を作って先輩に指導を受けている列へ入っていった。

バスケットボール部の仮入部を終えて帰宅している俺と彩楓の会

話。

「あの比野さん。本当にバスケ中学でやったただけだったんですか？」

「ああそうだ」

「でもフリーシュート最初に一回外したただけで他に外してませんでしたよね？」

「そうだな」

「その後にやった仮入部者同士の10r1（一対一）一回も負けませんでしたよね？」

「負けなかったな」

「それに最後にやった試合に先輩達に交じって参加して一人で十八得点あげてましたよね？」

「あげてたな。ついでに言うとおアシストは十七だ」

さらに言うとおアシスト（スリーポイント）が二本ある。

「さらにさらに部長さんや他の先輩方に熱心に入部するよう勧誘されてましたよね？」

「されてたな」

彩楓は口をぽかんとあけている。数秒して、

「なんでそんなにできるのに部活入らないんですかー！」

何故か叫びながら俺の襟元を持って揺さぶる。

「やめろ、頭が揺れてクラクラする」

「だってだってそんなに出来るんだからもったいないじゃないですかー！恩を売るところかあまりに凄くてびっくりしちゃいましたし！」

彩楓の手を離して距離をとる。

「入部するかどうかは俺の勝手だし恩を売ろうとして失敗したのはお前の勝手な推測と性格の悪さのせいだ。」

「私は性格悪くありません！」

ブンツと風を切る音がして、彩楓のスイングした鞆が横から飛んできた。寸前で避けたが顔の目の前を通過していった。

「なんで避けるんですか！」

「・・・お前今日その鞆に入ってる持ち物全部言ってみる」
人差し指を顎にあてて思い出す彩楓。

「えっと、国語と社会と英語と理科と数学、私愛用のステンレス製のクマの弁当箱に缶のペンケースですね」

「量も内容も最悪の五教科が入ってる上にステンレス製の弁当箱まで入ってるじゃないか！」

そんなんで風を切るほど早く顔面をぶん殴られたらひとたまりも無い。一瞬で失神できる自信があるぞ！

「そしたら私の行き着けの病院紹介してあげますから」

笑顔で言われても。そもそも俺は失神したくないわけなんだから。

「でもほんつと~~~~~~~~に、もつたいないです。はあはあ・・・」

溜めに貯めて、自分で息を切らしている。アホ。

「いくらできてても楽しくないと意味無いだろう」

「バスケットボールがつまらないとでも？」

ここでそうだと言ったら彩楓に殴られるか全国のバスケットボール選手及びファンに標的にされ文句が殺到するだろう。最悪その両方。でも、違うから。

「いや、結構楽しいし運動をする分にもいいスポーツだろう」

「じゃあなーにが気に入らないんですか？」

「言わないと、いけないのか？」

「言わないと、いけないです」

彩楓はこつちが向けた目を真っ直ぐに見返してくる。言うしかないのか。

「何を言っても殴るなよ？」

「善処します」

政治家発言はズルいと思うんだが、彩楓の言葉を信じよう。

「・・・汗をかくのは嫌いなんだ」

言ったよ。うん正直に、そしたら次の瞬間また鞆が飛んできた。

「うおあぶねっ」

頭の方にまた放たれたそれを俺は体制を低くし頭を下げてなんとか避けた。髪の毛何本かもってかれた気がするけど。

「だからそれはやめろって、マジ当たったらしゃれになんないから」「ふうんだ。スポーツを根本的に否定するような人にかける情けなんてありませんっ」

何を怒ってるんだこいつは。

「世の中したくてもできない人はたくさんいるんです。それを汗をかくのが嫌いだからって、スポーツをしないなんて、私はそんな子に育てた覚えはありませんっ」

俺も育てられた覚えは無い。でも『したくてもできない人はたくさんいる』か、彩楓はずっと入院していた。スポーツや運動だって制限されていてやった事なんて当然ないんだよな。

「確かに。そうだな」

「無気力の塊の鳴海さんでも理解できましたか？」

失礼だな。否定はしないけど。

「まあ、そうだな。」

そう言うとき彩楓はスポーツの事を熱心に語って説教をはじめた。でもここはおとなしくしていよう。知らず知らずとは言え相手の考えに逆らうようなことを言っていたんだ。ストレスは体に影響を与える。俺もそれなりに持論はあるが、今回は黙って聞いていよう。病気の事を何も聞かされてないのにいろいろと気遣う俺、健気だな。

「まあ私は出来ない方の人間ですからこんな事いいますけど、出来る人は出来る人でいろいろあるんでしょうね。才能を無駄にするのはあんまり良くない事だと思いますけど、自分のしたいようにするのが一番なんですよ」

途中スポ魂マンガの素晴らしさとかを語ったりもしていたが、

彩楓はそう言って締めくくった。

「・・・・・・・・・・」

「なんですか？比野さん。こっちをじーっと見て、惚れちゃいまし

たか？」

「なんでそうなる」

「いや、熱い視線を送られていたものですから。違うんですか？」
違う。見ていた事は確かだが、熱い視線を送った覚えは無い。ただ俺の思う所と同じだった事に關心していたんだ。『自分のしたいようにする』それは『したくてもできない人はたくさんいる』と言う事に対立するように今回あるけれど、ある意味では一緒だ。これは正しいことだと思っている。そして、自分の思っているそれを押し付けるのではなく、違う意見のそれでも受け入れるような事を彩楓は言った。いい言葉は見つからないが凄い事だと俺は思っていた。でもそれを言う気にはなれなくて、

「お前もたまには良い事を言うんだな」

とだけ言っておいた。嘘はついていない。

「たまには、は余計です」

彩楓は怒っている顔をしていたが、俺は反対に穏やかな顔をして帰宅した。

味気なくてつまらないが、こんな感じが俺と彩楓の最近。

第02話（後書き）

読んでいたたいてありがとうございます。

気になった点や誤字脱字などがもしあればよければ教えてくださるとありがたいです。

気に入っていただければ感想もお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4071c/>

こころのほうこう

2011年10月4日03時07分発行